

Fukuoka University MEDICAL SCIENCE NEWS

No. 69

編集・発行
福岡大学医学会
福岡大学医学部内

福岡大学医学会ニュース

この度、学部長より「福岡大学医学会ニュース」の原稿依頼がありましたので、私の近況報告と事業団の紹介をもって務めを果たしたいと思えます。

福大在職中は、「油山の麓から」というタイトルで時々雑感を投稿する事がありました。現在の私の部屋は天神、昭和通から那珂川沿いを少し北に入ったビルの2階にあります。部屋の東側はほぼ前面窓で那珂川に面しており、北は河口手前博多ポートタワーから南は中洲やキャナルシティまで見渡せます。対岸は桜並木で所々にベンチがあり、時々人は人が休息していて、まさに那珂川の畔です。福大への通勤は自家用車でしたので、城南学園通りから眺める油山の四季は美しく、春から夏は新緑から深緑へ、秋は紅葉、冬は雪景色と折々楽しんできましたが、地下鉄通勤の今は、桜やツツジ、紫陽花に続いて、これからの那珂川沿いの景色の変化が楽しみです。

さて、本事業団は、日本対がん協会福岡県支部と聖マリア病院が母体である九州産業衛生協会が平成 21 年 4 月に合併して設立された財団法人です。合併に際しては、当時の横倉福岡県医師会会長や平田福岡県保健医療介護部長、井手聖マリア病院理事長などの指導の下、1 年余りの協議を経て新事業団が発足しました。私もその協議会のメンバーでしたが、設立後は対がん協会から会長職を引き継がれた原会長の下、松田県医師会会長、香月県保健医療介護部医監、前原九大教授とともに副会長として事業団の運営に携わってきました。そのようなご縁もあり、昨年福岡県認定公益財団法人としてスタートしたばかりの本事業団が、本年 4 月 1 日より内閣府認定として再出発したのを機に、新理事長に就任した次第です。これも、昔からの友人である井手聖マリア病院理事長の、時代を見据えたご英断によるものと感謝しております。原則的には原会長は学術担当、私は組織運営担当で分業しています。内閣府への移行により、今後は県域

を越えた西日本地区で健診事業も可能となり、地域の実情に即した調査研究や普及啓発活動がさらに広範囲に展開できるようになります。

極端な少子高齢化により、毎年社会保障費は高騰し、医療・介護・福祉の切れ目のない連携なしには地域住民の安全・安心な日常生活を守るなど覚束ないわが国においては、ようやく全国民がその危機的状況を理解するに至り、今まさに国家として全国民を守るための明確な制度設計が求められています。そこで本事業団も、事業主体であるがん検診や生活習慣病健診などを通して、健康に関するデータの調査・研究、健康情報の普及・啓発、そして、それらに関する研究助成を柱として、病気になる前に住民の健康を守ることを目的として活動を続けています。このような活動から、

行政区域を越えた地域住民主体の健康まちづくり運動へとつながり、その結果住民一人ひとりの意識の向上が、次世代を担う子供たちの心身双方の健康教育に反映されればこの上のない喜びであると思っています。このような健診データの一元化も、地域完結型医療・介護の連携も、10 年ほど前から私が医療情報部長や病院長を通して七隈地区で福大病院を中心に進めていた「健康まちづくり」活動と基本的な考えは同じです。今はまた人生の第 4 コーナーを回って、別の立場から夢を追い続けております。

景色が変われば意識も行動も変わると思えます。皆さん勇気を持って既成の枠組みから脱却し、身の回りの景色を変えてみましょう。皆さん方のチャレンジを、那珂川の畔から見守って行きたいと思っています。今後とも宜しく願ひいたします。



那珂川の畔から

公益財団法人福岡県すこやか健康事業団

理事長 瓦林 達比古

新風

new phase

平成 26 年 4 月 1 日付けで本学へ赴任、昇格された方に自己紹介をしていただきました。



麻酔科学教授
山浦 健

このたび比嘉和夫教授から教室を引き継がせていただきました。

昭和 42 年福岡市で生まれ、昭和 61 年に福岡大学附属大濠高等学校を卒業し、平成 4 年に九州大学を卒業しました。

卒業後は九州大学麻酔科蘇生科に入学し「手術安全」を基本理念とした生体防御医学を学び、関連病院研修では福岡市立こども病院で小児心臓手術麻酔を、聖マリア病院の ICU で集中治療を研修しました。その後は経食道心エコー法などを用いて循環制御の臨床研究の指導を受け、学位を取得させていただきました。米国ウィスコンシン医科大学心臓血管施設に留学しこの間は主に低酸素時の脳血管拡張反応の基礎研究をしました。帰国後聖マリア病院麻酔科勤務を経て大学へ、その後 4 年間は麻酔科開業医の日本の草分け的存在として古くから地域医療に取り組んでいる麻酔科辛島クリニックで地区医師会の一員として臨床麻酔の武者修行を行ないました。大学に復帰後は医局長業務や手術部副部長としての実務経験をさせていただき、臨床研究の他、痛みの基礎研究にも取り組みました。

今後は臨床麻酔、集中治療、ペインクリニック、緩和医療などの分野における臨床と教育および臨床研究を推進し、さらに基礎研究では痛みの研究を福岡大学の総合大学としての特徴を生かして横断的な共同研究で行なっていきたいと思っています。

学生時代は高校生の時から乗り始めたバイクを楽しみ、大学時代は友人とオーストラリア縦走も楽しみました。その後はこの

危ない遊びからは手を引き、自転車に変えました。最近の楽しみは、なんだか隠居生活みたいですが 2 匹の犬と家庭菜園にまわっています。

どうぞよろしく願いいたします。



皮膚科学教授
今福 信一

このたび皮膚科学教室の 3 代目の主任教授を拝命しました。私は長崎市で生まれ育ち、祖父・父ともに皮膚科の開業医で、父はまだ現役です。青雲中学・高校を卒業後平成 3 年九州大学医学部を卒業後九州大学皮膚科に入局し米国メリーランド大学でヘルペスウイルスの研究に従事後、九州大学病院、広島赤十字・原爆病院、北九州市立医療センターなど地域の基幹病院の診療部長を経て平成 19 年、中山樹一郎教授の主宰する福岡大学皮膚科学教室に講師としてお世話になり、准教授を経て現職に至りました。診療・研究ともにウイルス感染症と乾癬という炎症性の角化症を専門にしていますが、市中病院での経験が長く水虫から癌の手術まで皮膚科全般何でも診療して来ました。福岡大学は大学病院ながら一般的な疾患から重症まで幅広い患者さんが受診するので皮膚科専門医を目指す若い医師達の臨床研修の場として大変に有用で、また私の医師としてのスタンスによく合っていると感じています。小さくてとても若い教室ですが、詳細に観察し記録する記載皮膚科学を診療の基礎として、皆で皮膚科診療の腕を磨いていきたいと思っています。研究は「臨床を科学する」というテーマで行っております。現在当教室ではいくつかの疾患の患者レジストリを作っていますが、これらの患者をしっかりとフォローして真に有用な治療が何なのか見定め、開発できる仕事をしたいと考えています。学生には皮膚を通して患者全体を診る楽しさを教えていきたいと思っています。趣味は写真撮影ですが、最近は忙しくて専ら自宅で真夜中に花を撮るくらいになっています。多くの先生方に助けられてここまで歩いて来

医師国家試験結果報告

第 108 回医師国家試験(2 月 8 ~ 10 日実施)に 123 人が受験し、101 人(新卒 84 人・既卒 17 人)が合格しました。合格率は 82.1%、新卒のみの合格率は 84.8%でした。

看護師・保健師国家試験結果報告

第 103 回看護師国家試験(2 月 16 日実施)に 89 人が受験し、全員が合格しました(合格率 100%)。また 89 人全員が第 100 回保健師国家試験(2 月 14 日実施)にも合格しています(合格率 100%)。

学位取得

次の方は、平成 26 年 3 月 25 日付けで福岡大学より医学博士を授与されました。

課程修了による学位取得者

- 太田 岳晴(人体生物系) • 田中 潤一(病態機能系) • 内藤 玲子(先端医療科学系)
- 山田 梢(病態構造系) • 井上 律郎(病態機能系) • 友納 優子(先端医療科学系)
- 佐藤 啓介(病態構造系) • 松本 佳久(病態機能系) • 南 星旭(先端医療科学系)
- 大川 将和(病態構造系) • 青柳 直子(病態機能系) • 宮田 康平(先端医療科学系)
- 淵上 あき(病態構造系) • 松田悠三子(病態機能系) • 愛洲 尚哉(先端医療科学系)
- 川村 栄一(病態構造系) • 河野 直子(社会医学系) • 中嶋恵美子(先端医療科学系)
- 後藤 雄輔(病態機能系) • 清水 知彦(先端医療科学系) • 永田 済(先端医療科学系)
- 小林 知弘(病態機能系) • 中村 歩(先端医療科学系)
- 野村 智洋(病態機能系) • 野尻 剛志(先端医療科学系)

論文提出による学位取得者

- 芹川 威(循環器内科助手)

られたことを心より感謝しますとともに、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひします。



筑紫病院
耳鼻いんこう科教授
坂田 俊文

私は1987年に本学を10回生として卒業し、そのまま耳鼻咽喉科に入局しました。関連病院の医長や大学院を経験し、少しずつ医師を生業とする自信が芽生えるようになりました。2008年からは筑紫病院に異動し、耳科/鼻科手術を中心とした診療と聴覚に関する臨床研究を続けながら現在に至っております。早いもので気がつくと50歳代中盤となり、医師生活も全行程の半分以上を通過していました。あと何年医師として実働できるかわかりませんが、今はただ母校の関連施設で仕事ができることに感謝しつつ、診療、研究、後進の指導、学生教育に励む所存です。そのためには次世代を担う若い医師との相互交流が不可欠です。より多くの若い力が耳鼻咽喉科の世界に飛び込んでくることを願っています。

さて、仕事のお話だけでは自己紹介になりませんので、趣味についても触れさせていただきます。私の趣味には動的なものと静的なものがあります。動的なもの代表は自動二輪や乗用車の運転で、若い頃には目を三角にして速さを競っていました。今考えると赤面モノですが、有り余るエネルギーの発散には最適でした。現在はエネルギーが枯渇気味なので、怪我のリスクが大きい自動二輪を自粛し、安全な乗用車で大人の散歩を楽しんでいます。とは言っても、今は出張病院間の往復が現実です。散歩といえば、無目的にあちこちを歩き回り、デジカメで普段着の情景を切り取る作業も好きなひと時です。一方、静的なものには平面造形や立体造形があります。具体的には意味不明なイラストや怪しげなオブジェなどですが、寡作なうえんに無理矢理進呈するので手元には作品が残りません。第三者の目に触れることが創作の強いモチベーションになってきました。これまで笑顔で受け取って下さった方々には感謝するのみです。

以上が私のプロフィールです。今後とも職場の内外で、何卒よろしくお願ひ致します。



薬理学准教授
喜多 紗斗美

このたび、福岡大学医学部薬理学講座の准教授に昇格させていただきました喜多紗斗美です。科学技術特別研究員として国立循環器病センター研究所で勤務した後、福岡大学医学部薬理学講座での研究員などを経て、平成19年4月に同講座の助教として着任いたしました。生まれも育ちも関西ですので未だに関西弁が全く抜けませんが、福岡に来て既に9年が経過しており、福岡は第二の故郷となりつつあります。

研究では、岩本隆宏教授のご指導のもと、主にイオン輸送体(トランスポーターやチャンネル)の機能と病態についての研究を行っています。特にNa/Ca交換輸送体の心血管系での病態生理学的役割について興味を持っており、分子生物学的手法から動物実験まで様々な方法を用いて日々研究に励んでおります。

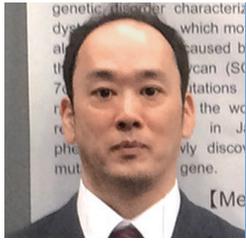
教育については、医学部3年生の薬理学の講義と実習の一部と大学院講義の一コマを担当させていただいております。薬理学はこれまでに学んできた基礎知識を臨床へ繋げるための重要な科目であり、常に責任を感じながら講義や実習に従事しております。当教室では学生の学習意欲を高めるための様々な新しい試み(実務向けのパーソナルドラッグ演習を医学部3年生版に改変した演習)を実施しており、私も講座の一員として少しでも学生教育や大学の発展に貢献できるよう、様々なことにチャレンジしていきたいと思っております。今後とも、より一層のご指導ご鞭撻を宜しくお願ひ申し上げます。



法医学准教授
柏木 正之

久保真一教授のご推挙により、平成26年4月1日付で准教授に昇格させていただきました。青森県八戸市の出身です。法医学志望で弘前大学に入学いたしましたが、医学部4年目の法医学履修時、教授は不在で、青森県内の司法解剖は隣県の岩手や秋田にご遺体を運んで行われていて、解剖見学どころか、解剖室がどこにあるのかも知らないまま、臨床実習が始まりました。そのまま臨床医養成のカリキュラムにのってしまふことへの不安と、後輩から新任教授の評判を聞いたことから、臨床実習の合間に法医学教室を訪ねて、それ以来、当時赴任して来られたばかりの池田典昭教授のもとで、解剖にも参加させていただきました。大学卒業後は、興味がある臨床講座もあったのですが、とりあえず法医学専攻の大学院に進学いたしました。大学院3年目の平成9年5月に、池田先生が九州大学へ赴任されたのに伴い、私も弘前大学大学院生のまま、九州大学に身をうつし、研究・鑑定補助を行っていましたが、助手を募集していた当教室先代の柏村征一教授を池田先生からご紹介いただき、平成9年10月より、当教室の助手として採用いただきました。

これまでは死体血液、尿、その他の体液中の微量物質を検索、定量することで、生前の傷病様態との関連について検討し、剖検診断への応用を目指すための研究や、法医鑑定実務を中心に行ってまいりました。平成23年の東日本大震災の時は、全国の法医学教室から死体検案を行う医師が交代で派遣されましたが、私も余震の続く福島、宮城、岩手の各県に入り、活動してまいりました。福岡市内及び近郊の検案業務も要請があれば、24時間対応しています。最近は独居の方が死亡発見され、警察が取り扱うことになり、法医解剖にまわご遺体が福岡でも増えています。これからも鑑定、教育、研究に励む所存です。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願ひ申し上げます。



神経内科学准教授 深江 治郎

このたびは坪井義夫教授のご推挙により神経内科学・准教授を拝命致しました。私は平成 10 年に順天堂大学医学部を卒業し、そのまま順天堂大学・脳神経内科に入局しました。平成 14 年には順天堂大学院へ進学しました。水野美邦教授のもとパーキンソン病と酸化ストレスの関連性についての研究を行い、学位を修得しました。ご縁があり、平成 24 年より福岡大学・神経内科に着任しました。

早いもので福岡大学に勤務し始めてから、2 年が経過しました。その間、臨床では病棟医長となり、多くの患者の入退院のマネジメントに関わるようになりました。また、私が着任してから神経内科には新入局員がおらず寂しい思いをしておりましたが、今年度より小倉先生、米良先生と 2 名の新入局員を迎え入れることができ大変嬉しく思っております。これからは研修医の教育にも力を入れて行きたいと考えております。研究ではパーキンソン病の wearing-off 現象をスクリーニングする質問用紙 (WOQ-9) の有用性についての臨床研究を行い、国際学会で発表させて頂く機会を頂きました。この研究につきましては論文を国際雑誌に投稿しようと思ひ、現在コツコツとまとめております。福岡大学で本当に良い経験をさせて頂いていると思ひます。今後も、より一層のご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い致します。



看護学科准教授 岩永 和代

このたび看護学科准教授を拝命いたしました。私は、産業医科大学医療技術短期大学看護学科を卒業後、産業医科大学病院、福岡大学病院に看護師として勤務しました。消化器外科病棟、整形外科病棟の看護師として働き、“中堅?”としてこれからのキャリアについて考えていたところに、厚生省(当時)看護研修センター看護教員養成課程で 1 年間学ぶ機会を頂き、看護教育に携わることとなりました。その後、国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科看護学分野で修士の学位を取得し、福岡大学附属看護専門学校に看護教員として勤務、平成 19 年 4 月福岡大学医学部看護学科開設時に看護学科に異動しました。

現在は、成人看護学領域で、周手術期患者の看護や災害看護を教えております。外科病棟での看護実践経験を生かし、学生には看護の素晴らしさを伝えていきたいと考えております。

看護学科では、成人看護学領域の先生方はじめ、他領域の先生方に、教育や研究についてさまざまご指導をいただき、刺激を受けながら過ごしております。また、福岡大学病院の耳鼻咽喉科病棟で、頭頸部がん患者の QOL と看護について研究

をしており、耳鼻咽喉科学 中川教授はじめ先生方、病棟師長、看護スタッフの方のご助言やご協力をいただいております。感謝申し上げます。

今後とも、周囲への感謝の気持ちを忘れずに、教育・研究にまい進する所存です。どうぞよろしくお願い致します。



看護学科准教授 浦 綾子

この 4 月から医学部看護学科の准教授に就任致しました。看護学科では成人看護学領域を担当しております。私は福岡大学病院の看護師に採用されて以来、福岡大学附属看護専門学校専任教員、看護学科講師と長きにわたり福岡大学にお世話になって参りました。臨床では手術部に 14 年間勤務し、手術部長や久田看護師長、麻生看護師長のご指導のもと主任看護師として、周手術期看護の向上を目指して術前訪問の導入や術中の体温管理、スタッフ教育を研究テーマに取り組みました。そして、文部省の看護教員養成講習会を修了し看護教育の道に進み、現在に至っております。

福岡大学人文科学研究科教育・臨床心理専攻課程では、「学ぶとは何か」「教育とは何か」「教師とは何か」「人間とは何か」「看護とは何か」… 教育を行う上で重要な概念を突き詰めて問い直し、教育観や学生観に関わる貴重な学びを得ました。また、新たな気持ちで学ぶ喜びを感じ、ご指導頂いた先生方への感謝と福岡大学への「母校愛」は大きく膨らみました。また、研究では「がんサバイバーの QOL を高める身体活動や睡眠」をテーマに、臨床の皆様にも多くのご支援をいただきながら活動しております。

今、看護学基礎教育は、主体的・創造的に学びエビデンスに基づく看護実践能力をどう育むかが問われています。本学科は大学病院が隣接し看護部や診療部門のご理解とご協力をいただき恵まれた学習環境にあります。また、学生は純粋で脆さもありますが、志が高く臨床で会う卒業生は逞しく成長しております。看護学基礎教育は発展途上にありますが、この素晴らしい環境で「母校愛」を源に社会に貢献できる人材の育成に邁進していく所存でございます。今後とも皆様方のご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



看護学科准教授 佐久間 良子

このたび福岡大学医学部看護学科 母性看護学 准教授を拝命致しました。看護の基礎教育は、福岡大学附属看護専門学校にて学び、9 回生として卒業しました。その後、九州大学医療短期大学専攻科特別専攻助産学科へ進学し、福岡大学病院産科病棟に助産師として就職致しました。臨床での約 10 年間は、大学病院の産科に求められる助産師とは何か、その責任の

重さや自身の姿勢、必要な臨床実践能力について深い学びを得、それは現在の私の看護観につながっています。学位は、「Food allergens are transferred intact across the rat blood-placental barrier in vivo.」で中村学園大学大学院栄養科学研究科にて栄養科学博士を取得致しました。助産師が実践する「食」の援助のエビデンスを探求しようと、動物モデルを用いた組織形態学的研究に挑戦しました。今後も食の側面から女性の健康支援に関わりたいと考えています。平成 8 年から 21 年の閉校を迎えるまでは母校の専門学校の専任教員として勤務し、その後本学科に着任致しました。本大学は総合大学であり教育環境が整っています。教育の場に異動してからは、看護の学びには欠かせない臨床実習ですが、病院診療部や看護部の教育的な連携にも大変恵まれていることを実感しています。自身もこの環境下で、基礎教育と看護実践者としての教育を受けてきたことを振り返ると、感謝の念に堪えません。これからも、母性看護学の大切さを伝える教育力を磨き、この恵まれた教育環境を大切に継続・発展させ、学生の学びがより深められるよう、日々精進して参りたいと思います。今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。



看護学科准教授
吉川 千鶴子

今年 4 月 1 日付で看護学科（基礎看護学領域）の准教授に昇格いたしました。九州大学医療技術短期大学の第

4 期生として卒業し、福岡大学病院の耳鼻咽喉科病棟に配属されました。以来、臨床と教育で 30 年以上の月日を福岡大学で過ごしたことになります。

今では考えられないことですが、入職当時、1 年目は看護研究のチームに入るのが当然とされていました。新人も先輩も研究に関しては、あまり垣根がなかったように思います。チームの問題意識は、頸部術後患者の寝衣交換に苦慮していることでした。頭頸部腫瘍患者の頸部郭清術後は、寝衣の襟元が術後の出血や浸出液で汚れます。患者は不快でたまらないのですが、頸部を伸展させてはならないため、寝衣交換は患者にとって大きな負担でした。そこで、着脱がしやすく、襟部分だけ取り替えられて、点滴やドレナージの管理がしやすい病衣の改良をテーマにしました。生地は着心地が良く洗濯に耐え乾きやすい材質を選択し、患者の行動制限が最小になるパターンをおこし、落ち着いた色調の病衣を作成しました。学生時代にリフォームコーナーでアルバイトしていたので、生地の選別、卸問屋との交渉、洋裁の腕前が役に立ちました。第 1 号を頸部郭清術後の患者 5 例に適用し、通気性、吸湿性、着心地、色調、着脱しやすさを評価の視点にしました。その後少しずつ改良を加えて、数を増やし、頸部郭清術後だけでなく頭頸部腫瘍の術後の病衣として活用されるようになりました。

このときの私の頭の中にあっただのは、昭和 52 年に出版された氏家幸子著「看護技術の科学的検証」でした。当時、氏家氏は大阪大学医療技術短期大学部で教員をされており、学生と共に看護技術を実践科学として確立するために、清拭や姿勢と体位などを取り上げ、看護技術を科学的に検証しており、本書はその経過をまとめたものです。清拭であれば、身体を拭く cloth のサイズ、糸の織りと糸番号、重量と含水量、湯の温度と使用

長い間 ありがとうございました

平成 26 年 3 月 1 日～9 月 30 日
までに退職された方

- 瓦林達比古教授
(産科婦人科学)
- 比嘉 和夫教授 (麻酔科学)
- 嶋松 陽子教授 (看護学科)
- 高谷 嘉枝教授 (看護学科)
- 中村 光江教授 (看護学科)
- 松尾 ひとみ教授 (看護学科)
- 仁田原慶一准教授
(麻酔科学)
- 福田 和美講師 (看護学科)
- 山田 小織講師 (看護学科)
- 岩田 郁講師
(消化器内科)
- 小河原 悟講師
(腎臓・膠原病内科)
以上、3 月 31 日付け
- 三宅 吉博准教授
(衛生・公衆衛生学)
以上、6 月 30 日付け
- 西見 優講師
(心臓血管外科)
以上、8 月 31 日付け
- 星野誠一郎准教授 (手術部)
- 中井 完治講師
(筑紫病院 脳神経外科)
以上、9 月 30 日付け

福岡大学医学会第 70 回例会および第 37 回総会 (報告)

日時：平成 26 年 9 月 24 日 (水) 17 時～18 時 40 分 場所：医学部臨床大講堂

1. 第 70 回福岡大学医学会例会 【進行】集会幹事 今福 信一

- 1) 開会の辞 集会幹事 今福 信一
- 2) 会長挨拶 医学部長 朔 啓二郎
- 3) 第 16 回福岡大学医学会賞受賞論文講演 講演 15 分 (質疑応答含む)
講演者 1…松本 慎二 座長…鍋島 一樹
「Morphology of 9p21 Homozygous Deletion-Positive Pleural Mesothelioma Cells Analyzed Using Fluorescence In Situ Hybridization and Virtual Microscope System in Effusion Cytology」
講演者 2…四元 房典 (代理：宮田 康平) 座長…黒木 政秀
「Molecular Hierarchy of Heparin-Binding EGF-like Growth Factor-Regulated Angiogenesis in Triple-Negative Breast Cancer」
講演者 3…川内 絵未 座長…朔 啓二郎
「Novel Molecular Imaging of Atherosclerosis With Gallium-68-Labeled Apolipoprotein A-I Mimetic Peptide and Positron Emission Tomography」
- 4) 第 16 回福岡大学医学会賞論文投票
- 5) 新任教授講演 講演 25 分、質疑 5 分
講演者…今福 信一 (皮膚科学) 座長…朔 啓二郎 「乾癬の天文学」

2. 第 37 回福岡大学医学会総会

- 1) 議事 【進行】庶務幹事 松永 彰
① 報告事項 ② 平成 25 年度会計報告および平成 26 年度予算案 ③ その他
- 2) 第 16 回福岡大学医学会賞授賞式 【進行】集会幹事 今福 信一
① 開票結果発表 ② 授賞式
- 3) 閉会の辞 集会幹事 今福 信一

第 16 回福岡大学医学会賞の開票結果、論文名および受賞者の写真は次頁に掲載

面の温度変化、皮膚温の変化などを詳細に観察しデータ化して検証しています。現在の基礎看護技術のテキストの根拠となるデータは、その時のデータに依拠しているものが数多くあります。

30 数年前の「頸部術後患者の病衣の改良と評価」は、研究とはほど遠いものだったのかもしれませんが、しかし、以来、患者が安心して安楽に療養生活が送れるように、がん患者の痛みや、がん性臭気、カテーテル管理、口腔粘膜障害など、患者の困り事を解決する看護技術を、臨床の仲間と一緒に追求してきました。大学院では教育・臨床心理を専攻し、患者と看護者の関係に着目してケアリング理論を研究いたしました。現在は、「化学療法を受ける患者の口腔ケア」をテーマに研究に取り組み、臨床との協力関係を築いてきました。

学士課程の看護基礎教育に携わって 8 年目になります。学生には、経験則ではなく、自分の考えの中で自分の行動を導いていく思考をしっかりと身につけて欲しいと願っています。微力ではありますが、教育や研究を通して、患者の安心、安全を守る医療人の育成を目指して努力していきたいと思っています。



看護学科講師
牧 香里

このたび、福岡大学医学部看護学科の講師として 4 月 1 日に着任いたしました。

私は熊本出身で、看護師として済生会熊本病院の脳神経外科病棟と循環器病棟に勤務し、主に急性期の、脳や心臓の疾患に罹患した患者・家族との多くの出会いを通して、様々な看護の経験を積んでまいりました。また、実習指導に携わる中で看護教育にも関心を持っておりました。

平成 7 年に前任校である聖マリア学院大学看護学部（当時は短大でした）にて、教員としてスタート致しました。ここでは、基礎看護学および成人看護学領域の教育に携わり、看護教育が大学へと移行していく中で、臨床とのギャップが叫ばれ、いかにして技術力の向上をはかるかを考えさせられました。

さらに、家族看護を実践してきた教員との出会いや ICU 病棟での脊損患者の家族の危機的状況を目の当たりにしたことがきっかけで、家族看護の研究を始めました。家族看護に関心のある教員と実習病院であった聖マリア病院のスタッフとともに家族看

護研究会を立ち上げ、事例検討を中心に展開して参りました。

平成 22 年に久留米大学大学院医科学研究科臨床看護学群がん看護論専攻に入学し、手術前のがん患者のご家族を対象に家族機能とストレス対処について研究を行い、修士（医科学）を取得いたしました。がんの告知から手術療法を受けるまでの患者とその家族のストレスや葛藤・不安について、今後も研究を重ね、少しでも軽減がはかれるような看護をタイミングよく提供できたらと考えております。

久留米での生活が長く、福岡の事はほとんどわからないのですが、福岡大学という素晴らしい環境の中で気持ちを新たに、微力ながら努力精進する所存でございますので、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



放射線部講師
黒木 嘉典

このたび、福岡大学病院放射線科 吉満研吾主任教授の御推挙により講師を拜命いたしました。

私は平成 2 年に福岡大学医学部を卒業後、福岡大学医学部放射線医学教室に入局いたしました。当院及び久留米市の聖マリア病院での研修医終了後、大学院に進学、先代岡崎正敏主任教授の御指導のもと肝臓癌の自然史の研究にて学位を取得しました。その後は国立がんセンター東病院（現国立がん研究センター東病院）、栃木県立がんセンターと癌専門病院に勤務し、16 年ぶりに九州上陸となりました。がんセンター勤務時代は消化器や泌尿器科領域を中心に診療にたずさわっていましたが、最近の数年間は MRI を中心とした乳腺領域の仕事が多い印象があります。

出身は宮崎県宮崎市で高等学校卒業までのんびりとした田舎で過ごしました。高校卒業後初めて見た福岡の街は大きく賑やかでとても華やいだものでした。今回久しぶりに福岡の街を眺めたのですが、やはり当時と同じような盛況ぶりで関東平野のハズレを生活拠点としていた身にとっては眩しいばかりです。特に都市高速の発達や地下鉄七隈線・福岡外環状線の開通など驚くばかりで、学生時代に住んでいた下宿は道路工事のために跡形もありませんでした。あわてて油山に登り、福岡市を一望したところ、少々の変化があっても「福岡」であることが確認できホッと



講演された先生方を囲んで(左から黒木先生、鍋島先生、松本先生、川内先生、朔医学会会長、今福先生)

祝 第16回 福岡大学医学会賞

50 音順



松本 慎二

「Morphology of 9p21 Homozygous Deletion-Positive Pleural Mesothelioma Cells Analyzed Using Fluorescence In Situ Hybridization and Virtual Microscope System in Effusion Cytology」



川内 絵未

「Novel Molecular Imaging of Atherosclerosis With Gallium-68-Labeled Apolipoprotein A-I Mimetic Peptide and Positron Emission Tomography」



四元 房典

「Molecular Hierarchy of Heparin-Binding EGF-like Growth Factor-Regulated Angiogenesis in Triple-Negative Breast Cancer」

しているところです。

私は比較的早期に大学を離れ医師としての研鑽期間の大部分を癌専門病院で過ごしており、いろいろな意味でズレていることが多いと思っています。今後はこのズレを上手に利用しながら臨床・研究にたずさわり福岡大学病院、ひいては地域医療に貢献できたらと考えております。今後とも御指導・御鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



看護学科講師
有田 久美

このたび福岡大学医学部看護学科の講師を拝命いたしました。私は、現看護学科の前身である福岡大学附属看護専門学校を卒業後、保健師免許を取得、その後福岡大学病院へ看護師として就職しました。病院では、眼科病棟をはじめとし、循環器内科、医療相談部などの複数科で臨床経験を積みました。特に医療相談部では、現在のような介護保険制度はなく、病院と地域を結ぶシステムも不十分でしたが、退院後支援の必要な患者への継続看護を手探り状態で支援しました。医療や看護は病院の中では完結せず、今後は生活の場である在宅が中心であり、継続看護をどのように進めるかが重要になると感じました。この時の経験が現在の私の教育や研究の原点となっています。高齢化が加速する社会情勢の中、平成9年の看護基礎教育カリキュラム改正により新たに「在宅看護論」が導入され、平成10年に福岡大学附属看護専門学校へ在宅看護論担当の専任教員として異動しました。在宅看護論は看護分野では新しい学問体系であり、授業や実習体制の整備など、諸先生の指導の下、ゼロの状態から開拓、構築をしました。平成17年に在宅療養者の服薬状況に関する研究で、国際医療福祉大学大学院にて修士の学位を取得し、平成20年には、本学科老年看護学の助教として着任しました。これらの経験を生かし、今後も教育・研究に自己研鑽を積み重ねていきたいと思っております。日本は未曾有の超高齢社会となりましたが、疾患や障害を抱えながらも、その人が望む場所でその人らしく暮らし続けることができるような看護を追及していきたいと考えております。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。



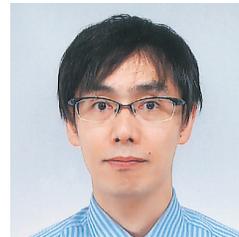
産婦人科講師
伊東 裕子

宮本新吾教授のご推挙により、このたび福岡大学産婦人科講師を拝命いたしました。大分県別府市出身、福岡大学医学部在学中はバスケットボール部で充実した学生生活を送り、6年生では全医体で準優勝でき後輩たちのおかげでとても思い出深い夏になりました。平成11年に福岡大学医学部を卒業後、大分医科大学産婦人科（現大分大学）に入局しました。生殖内

分泌学を中心に臨床および研究に従事し、大学院では卵管に関する研究で学位を取得いたしました。その後、福岡大学医学部産婦人科へ入局、県の周産母子医療センターであるためハイリスクの症例の多さに驚かされ、またがん症例にも多く携わる機会を得て勉強させていただいています。

平成21年からは米国テキサス州ダラスにあるテキサス州立大学 UT Southwestern Medical Center に3年間留学させていただきました。子宮内膜および子宮内膜症の研究をしてまいりました。テキサスは広大な荒野にサボテンがあるのかと思っていましたが、美しい湖が点在し緑豊かな街で美味しいお肉のあるところでした。週末 Enjoy するために仕事をするという国から日本に戻ると、宮本教授をはじめとして皆が毎日本当に慌ただしく臨床、研究それと教育まで行っていました。これが日本人なのかと思いつつも日々を楽しむことで仕事の活力にできたらと考えています。

今後は、受精卵のときからおばあちゃんになるまで女性の一生に関わっていく産婦人科の魅力も伝えていけるよう努力していきたいと思っております。これまで多くの先生方に御指導いただきましたが、これからも日々精進して参りますので今後ともよろしくお願い申し上げます。



筑紫病院
眼科講師
佐々 由季生

福岡大学筑紫病院にはH22年4月より勤務させていただいております。H8年に九州大学を卒業後、翌年より山口大学病院眼科、九州大学病院眼科で研修医生活を送り、H11年より九州大学眼科学教室猪俣孟名誉教授、石橋達朗教授のご指導の下、4年間網膜硝子体疾患の病態解明をテーマとして研究生活を送り、H18年から糖尿病網膜症研究のためにジョスリン糖尿病センターに3年間在籍いたしました。帰国後2年間浜の町病院眼科にて眼科臨床の基礎教育を受けた後、筑紫病院眼科向野利寛教授より網膜硝子体疾患に対する治療についてご指導を頂きました。このたび御推挙により筑紫病院眼科講師を拝命いたしました。

本大学で留学大学を含めて4つの大学にお世話になり、たくさんの方々にご指導いただきました。福岡大学眼科学教室は網膜硝子体手術では歴史が古く、私が学生時代、ロシアより手術を受けるため子供が来福したとの報道がありました。先日、医学図書館の近くに偶然その患者から送られたリンゴの木を発見し、当時を思い出しました。向野教授は硝子体手術黎明期より、その分野の臨床・研究に取り組み、昨年12月より筑紫病院病院長就任されました。現在、眼科診療部長・病院長を併任されており、その多忙な業務を少しでも支えることが出来るように、微力ながらご支援させていただいております。また、7年間取り組みました研究生活を治療に役立てるため、硝子体液や網膜増殖組織などを用いた臨床研究を進めております。教育面では、医学部学生や研修医に実際の診療方法や病態説明を通して、眼科学のおもしろさを少しでも伝えることが出来るように努力して参ります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

教室だより

Letter from a classroom



細胞生物学

近年の技術革新により現在では一日で個人の全ゲノム配列が解読できるようになりつつあり、また遺伝子制御方法等も飛躍的な発展を遂げ、医療における大きな変革はすぐそこまで来ています。この様な時代の流れの中、細胞生物学的な知識やゲノム情報に基づく診断・治療・予防法等の理解は、現在の臨床医、さらには将来の医療を担う医学部生にとってますます重要なものとなってきています。しかし、本格的に時間を費やして細胞生物学を学べる時は学生時代や大学院の時期しかなく、この貴重な時期に学生がどれだけ質の高い講義を受け、研究ができるかということは、その人の将来への可能性にも関わることであり、教育・研究に関して全力を尽くすことが我々の役割だと考えております。第1学年の「医学生のための生命科学」では、ゲノムや生命活動の基本単位である細胞のより深い世界や、基礎医学そのものの世界をより身近なものとして感じてもらい、第2学年の「組織細胞生物学総論・遺伝学・発生学」では、顕微鏡実習・講義にて細胞の機能、組織・組織間コミュニケーションの理解を深め、遺伝子の発現制御、遺伝様式等の機構を学習し、配偶子の接合から各器官および個体が形成される発生過程を理解することで、生命体としてのヒト、さらには疾患の理解への基礎を医学部の早い段階で習得してもらうことを目標としています。また、研究室配属では大学院生を含むスタッフで最先端の研究論文を抄読し、今、STAP細胞で世間でも話題になっているように、正しい研究の進め方や、論文の在り方等を学生たちに考えてもらう場を提供しています。これらの講義に対する白澤教授の情熱・姿勢は、学生にも高く評価され、医学部講義において連続で年間ベストレクチャー賞に選ばれ、ついには殿堂入りを果た

しました。研究においては、大腸癌発症の鍵となる KRAS 遺伝子の解析に始まり、その制御遺伝子として EGF ファミリーの一つ



である epiregulin の同定と機能解析、新たな代謝関連分子としての KRAP の同定等、様々な発癌関連分子の解析を行ってきました。近年では、二次元環境とは異なる、より生体環境に近い実験系を樹立し、三次元特異的な KRAS 制御分子群の解析を行っています。一方、疾患ゲノム解析により自己免疫性甲状腺疾患（バセドウ病、橋本病）感受性遺伝子として、独自に ZFAT を同定・報告し、その機能解明に関する研究を精力的に進めています。これまでに、ZFAT が免疫系細胞や血管内皮系細胞において、さらに、初期発生、血球分化においても必須の役割を担うことを明らかにしてきました。最近、身長、癌・心血管疾患、多発性硬化症の治療反応性等においても ZFAT の遺伝子多型が関与する可能性が相次いで報告されています。これらのことは、ZFAT が生命の発生、細胞生命プログラム、疾患発症を含む様々な局面において、重要な生命現象を規定する分子として機能している可能性を示唆しているものと考え、研究を展開しています。私どもは福岡大学基盤研究機関先端分子医学研究所 (FCAM) の中心的な役割を果たしつつ、若手研究者育成を行うとともに、KRAS, ZFAT が関与する多様な生命現象の謎を紐解いていくことを目指しています。Home Page : <http://cellbio-fukuoka-u.com>

教室だより

Letter from a classroom



泌尿器科学



当科は、主として副腎・腎・尿路・男性生殖器を扱う外科系の診療科です。手術を主な治療手段としてはいますが、泌尿器科には外科的な部分にとどまらず内科的側面があります。すなわち腎尿路に関しては診断から治療まで当科だけで

完結できるという一方で、腎臓学・男性学・生殖器学にとどまらず、腫瘍学・感染症学・内分泌学・小児学・移植学・女性学・内視鏡学など多方面との境界あるいは関連する領域を持っている特徴があります。内視鏡の歴史が膀胱鏡から始まったという事実が示すとおり、当科と内視鏡は診断から治療まであらゆるステージで密接に関連しています。外来診療での膀胱鏡検査から、前立腺肥大や膀胱腫瘍に対する経尿道的切除術 (TUR) には教室開設初期からの多くの経験があります。現在では副腎腫瘍や腎・尿路腫瘍そして前立腺癌の大部分に腹腔鏡下手術を行っており、内視鏡外科を専門の一つとする田中正利教授の指導のもと入江慎一郎講師を中心にこの分野をリードしてきました。近々、膀胱癌の全摘手術へも適応を拡大する予定です。そして、ロボット手術を開始できることを今や遅しと待機して

いる状態です。当科の腹腔鏡下手術の成績には満足すべきものがありますが、さらに精緻な手技が期待できるロボット手術への転換は大学の泌尿器科としては避けては通れないものと考えています。幸い前号の院長のお言葉に導入が明記されており、心待ちにしているところです。当教室開設以来のもう一つの柱として小児泌尿器科があります。泌尿生殖器系には先天異常が多く発生しますので、これに対して適切な時期に適切な方法で修正を加えることがこの部門の重要なミッションです。尿道下裂・膀胱尿管逆流・先天性水腎症・停留精巣が4大疾患ですが、いずれも手術の時期を間違えると心理的、腎機能的、生殖機能的な問題が残ってしまいますので適切に手術介入するよう心がけています。この分野は松岡弘文准教授を中心に診療を行っており、研究テーマとしては逆流性腎症の進行要因解析について進めてきました。新生児・乳児・小児の膀胱尿道鏡を挿え、あらゆる年代の児に十分な尿路検査が可能であること、また小児への腹腔鏡手術が行われていること、小児尿路結石に対して体外衝撃波結石破碎術を含めた治療ができる数少ない施設であることを自負しています。さらに当科の特徴として腎移植があります。福大病院での腎移植第一号は1984年に行われており、当院の移植外科分野では最も古い歴史を持っています。現在、この分野は中村信之講師を中心に行われており、生体腎移植・献腎（死体腎）移植・ABO不適合移植などあらゆる腎移植に対応し、腎臓内科と密接に連携を図り実施しています。また、研究は「移植腎の虚血再灌流障害」をテーマに行われています。本年は田中正利教授が第28回日本泌尿器内視鏡学会を主宰することになっており、当教室のメインテーマである泌尿器内視鏡外科治療学がますます発展することを願っています。